

平成 30 年 5 月 31 日現在

機関番号：21601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K11731

研究課題名(和文) 闘病仲間を失った子どものグリーフワーク・サポートプログラム作成に関する基礎的研究

研究課題名(英文) Fundamental research on creation of grief work support program for children who have lost their comrades

研究代表者

和田 久美子(WADA, KUMIKO)

福島県立医科大学・看護学部・教授

研究者番号：50320867

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：これまで、子どもを失った家族や看護師に対するグリーフケアに関する研究は多く行われていた。しかし、子どもに対するグリーフワーク・サポートに関する研究は少ない。本研究では、闘病仲間を失った子どもへの看護を実施している看護師への調査を行い、グリーフワーク・サポートプログラムの構成要素を明らかにした。今後は明らかになった構成要素をもとに、闘病仲間を失った子どものグリーフワーク・サポートプログラムの作成に向け、内容の検討を継続していく。

研究成果の概要(英文)：A study about grief care to the family and the nurse who lost a child up to now was performed much. However, there are few studies on grief work support for children. In this study, we conducted a survey on nurses who are carrying out nursing care for children who have lost their comrades, and clarified the components of the grief work support program. Based on the constituent elements that will become clearer in the future, we will continue discussing the content for the creation of a grief work support program for children who have lost their comrades.

研究分野：小児看護学

キーワード：グリーフワーク サポート 闘病仲間

1. 研究開始当初の背景

現在、医療の向上等から生存率の向上と共に長期フォローアップ、トータルケアに関する研究への取り組みが必要であることが示唆されている (Yoneyama・Wada・Nonaka・Oka, 2012)。小児がんと診断された子どもの生存率は高まっているが、治療のいかなく、亡くなる子どもがいることも事実である。そうした亡くなる子どもとともに入院していた子どもが、一緒に入院していた仲間を失うという状況に置かれている。子どもが、仲間の死を伝えられなくても何らかの異変を感じていることは、これまでの研究 (吉田他, 2012) でも明らかである。子どもにとって、近しい人が突然いなくなることは衝撃であり、そのことに対するケアを行う環境を整えるべきであろう。

これまで、子どもの入院環境に関する研究はさまざまに行われてきた (兵田他 2010, 伊藤 2009, 赤川他 2004)。その内容は、遊び、学習といったものが多くを占めている。本研究の代表者もこれまで、病院におけるボランティア活動という視点から入院している子どもを取り巻く環境に関して報告 (和田他 2011, 米山他 2011) を行ってきた。また、子どもを取り巻く人的環境として、看護師、保育士のことばに注目し、研究を行ってきた (和田 2011, 2007, 和田他 2008)。子どもを取り巻く環境として、子どもへのグリーフワーク・サポートに関しては、親が亡くなったことに関する研究や活動は行われている。また、亡くなった子どもの家族、子どもの死にかかわる看護師へのグリーフワーク・サポートは行われており、それに対する研究も多く行われてきた。しかし、入院している子どもへのグリーフケアに関する研究は非常に少ない。また、同じ病棟で闘病生活を行ってきた子どもへのグリーフワーク・サポートといった観点はほとんどなかった。思春期に

小児がんを発症した患児は、不確かな状況から、治療による急激な体調悪化や同病者の死といった現実直視する体験を通し、楽観視から一変して絶望へと全く異なる体験をしている (前田, 2013)。子どもが希望を失う環境の一つとなるのが仲間の死といえる。

近年、各学会の臨床の看護師による発表には「子どもの死について一緒に闘病生活を送ってきた子どもにどのように伝えるか」という内容が見受けられるようになってきた。これは、臨床現場で子どもの死について、同じ病棟にいる子どもとのかかわりの中で困難が生じており、この困難を乗り越えるための取り組みが行われていると考えられる。吉田ら (2012) は、これまでに看護師が死について尋ねられた際にどのような対応をしているかを明らかにしているが、グリーフワークに関する示唆はみられなかった。看護師が困難感をもっているということは、子ども自身も困難を抱えているといつてよいであろう。子どもの健全な成長発達を支援するために子どもへのグリーフワーク・サポートができる環境を早急に整える必要がある。

これまで研究代表者は、研究協力者と共にグリーフケアに関する日本国内の研究の動向を検討し、国際学会にて発表してきた。また、同じ病棟の子どもが亡くなったことを告げることに消極的な施設の看護師への面接調査を行っている。その結果、看護師は闘病仲間を失った子どもにどう接していいか困難を感じていること、ならびに家族を含めた子どもへのグリーフケアを行いたいと思い、サポート体制を整えたいと考えていることなどが明らかになっている。

【引用文献】

兵田直子 横山美江 小田慈 2010 入院中の子どものあそび環境に関する検討 小児科診療 73 (10) 1786-1792.

伊藤良子 2009 入院時に付き添う家族の入院環境に対する満足度-質問紙による調査から- 日本小児看護学会誌 18 (1) 24-30.

赤川晴美 鈴木敦子 檜木野裕美 鎌田佳奈美 高橋清子 蛭名美智子 二宮啓子 松森直美 杉本陽子 前田貴彦 2004 子どもが必要としている入院環境に対する看護師・医師・保護者の認識 福井県立大学論集 23 15-36.

Masako Yoneyama, Kumiko Wada, Sumiko Oka, Junko Nonaka 2012 THE TRENDS OF RESEARCH PAPERS AND CONFERENCE PRESENTATIONS BY ‘ JAPANESE SOCIETY OF PEDIATRIC ONCOLOGY NURSING ’ - FROM THE 9-YEAR HISTORY OF JAPANESE SOCIETY OF PEDIATRIC ONCOLOGY NURSING SIOP PUBLICATION ABSTRACTS

前田陽子 2013 思春期に小児がんを発症した患児の入院体験 日本小児看護学会誌, 22 (1), 64-71.

2. 研究の目的

(1) 文献から一般的なグリーフワーク・サポートの構成要素を明らかにする。

(2) 看護師に面接調査し、グリーフワーク・サポートの構成要素について個別の要素を明らかにする。

(3) 構成要素をもとに闘病仲間を失った子どものグリーフワーク・サポートプログラムの試案内容を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 一般的なグリーフワーク・サポートの構成要素

医中誌を用いて、2014年から2004年までの10年間を対象に「小児がん」、「グリーフケア」、「グリーフワーク」、「ホスピス」、「死」、「子ども」をキーワードとして検索を行った。論文形式が整っている研究を対

象とし、「グリーフケア」、「グリーフワーク」に関する記載がある論文について分析した。

(2) 実践の中でのグリーフワーク・サポートの構成要素

半構成的面接方法で同じ病棟で闘病仲間が亡くなったことを知った子どもの看護に関して4名に調査した。対象者は、臨床経験2年以上とし、同じ病棟で闘病仲間が亡くなったことを知った子どもの看護を実施したことがある看護師とし、全く経験がない看護師は除外した。

1回60分程度とし、インタビューガイドを用いたインタビューを行った。意味のある文章ごとにデータをコード化する。コードを継続的に比較分析し、サブカテゴリー、カテゴリーを検討した。カテゴリー間の関係を探査し、図式およびストーリーラインを記述し全体像をつかみ、全分析過程において、質的研究者から継続的にスーパーバイズを受けながら進めた。

(3) 闘病仲間を失った子どものグリーフワーク・サポートプログラムの試案

研究成果をもとに闘病仲間を失った子どものグリーフワーク・サポートプログラムを検討する。

4. 研究成果

(1) 一般的なグリーフワーク・サポートの構成要素

「グリーフケア」and「子ども」で40件、「ホスピス」and「子ども」13件、「小児がん」and「死」で32件であった。そのうち、論文形式が整い、「グリーフケア」、「グリーフワーク」に関する記載があったものは、「グリーフケア」and「子ども」で20件、「ホスピス」and「子ども」2件、「小児がん」and「死」13件であった。

文献内容から、「グリーフワーク」をサポート

する人」₁、グリーフワークケアに関する内容として「グリーフワークの理解」₁、「グリーフワークに関する教育」₁が、グリーフワーク・サポートを構成する要素と考えられた。

(2) 実践の中でのグリーフワーク・サポートの構成要素

子どもが亡くなったときに闘病仲間₁に事実を伝えるときに考慮していた内容として、【子どもの条件】₁、【子どもおよび母親への配慮】₁、【伝えるための調整】₁の3つのカテゴリーが明らかになった。【子どもの条件】₁については、「子供の状況で伝えるか判断」₁、「以前にも伝えて大丈夫だった」₁、「低学年では伝えるのが難しい」₁、「仲の良い子」₁、「日頃のケアが活かされる」という5つのサブカテゴリーから構成された。【子どもおよび母親への配慮】₁については、「お母さんの意向に沿う」₁、「お母さんが長く付き添える日に伝える」という2つのサブカテゴリーから構成された。【伝えるための調整】₁については、「サポートできる状況」₁、「お母さん、医師、スタッフと相談して決めた」₁、「医師から伝える」₁、「医師、お母さん、子ども、看護師で伝える」₁、「多職種との連携・調整」という6つのサブカテゴリーから構成された。入院中の子どもが亡くなったときに、闘病仲間₁に事実を伝えるときは、第一に子どもの年齢や聞きたいと思っているのかの状況や亡くなった闘病仲間との関係性・看護師との信頼関係を考慮することが条件となっていた。更に母親への配慮として母親の意向に沿うことや伝える日は母親が長く付き添える日となどであった。伝えた後のサポートとしても重要な支援者となる母親の意向を大切にしたものとする。闘病仲間₁に知らせた時は全てが順調に伝えられたわけではなく、困難であったことも予想される。事前の調整には親だけではなく子どもと関わる全ての職種との調整が図られて

おり、万全に支援体制を整えていたことが推察される。

また、闘病仲間₁が亡くなったことを伝えるときの課題として、【サポート体制】₁、【関わり】₁、【グリーフケア】₁の必要性が明らかになった。【サポート体制】₁については、「組織体制」₁、「看護師の体制」₁の2つのサブカテゴリーから構成された。【関わり】₁については、「関わる時間」₁、「関わる方法」₁の2つのサブカテゴリーから構成された。【グリーフケアの必要性】₁については、「グリーフケアの知識」₁、「グリーフケアの大切さ」₁の2つから構成された。闘病仲間₁が亡くなったことを伝えるときの課題として、【サポート体制】₁をしっかりと整えることが必要とされていた。「組織体制」としての問題が上っており、現時点でできることは行っているが、十分ではないことを示唆していた。また、「看護師の体制」では看護師自身がどのような体制で取り組むかということを悩みながら行っていることがわかった。グリーフケアに取り組むためには、組織、看護師ともに体制を整え取り組んでいく必要があるといえる。具体的なこととして【関わり】₁にも悩みを抱えている現状がうかがえた。「関わる時間」₁を多くもちたいという思いをもちながら、勤務体制などから十分に関わることができていると感じている。また、なんとなく行っている「関わる方法」₁が、それでいいのかと思いつつ悩みながら行っていることもうかがえた。これらのことから【グリーフケアの必要性】₁を感じていた。「グリーフケアの知識」₁を得たいというだけでなく、「グリーフケアの大切さ」₁を早いうちから学んでいくことが必要であるということも感じていた。【組織体制】₁、【関わり】₁、【グリーフケアの必要性】₁それぞれをきちんと学んでいく場を提供することも示唆されている。このような学習の場を提供する支援が必要であることが示唆された。

入院している子どもは、伝えてほしいというニーズをもっており、看護師も伝えないことによる困難感を感じている。今後、闘病仲間の死を伝えていくことを積極的に考えていくことができるように、グリーフワークをサポートする体制を作っていく必要性が示された。

以上のことから、『グリーフワークに関する教育』、『グリーフワークの理解』、『子どもの条件』、『子どもおよび家族への配慮および調整』、『伝えるための調整』、『サポート体制』がグリーフワーク・サポートの構成要素であることが示唆された。

今後は、闘病仲間を失った子どもへの看護を実践している看護師への調査を継続して行い、さらにグリーフワーク・サポートの構成要素を明確にする。また、これらの結果を反映した「闘病仲間を失った子どもへのグリーフワーク・サポートプログラム」内容の検討を継続していく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計 3 件)

須山達也、加藤茜、淵田明子、和田久美子、闘病仲間が亡くなったことを伝えた後の課題、日本小児看護学会第 26 回学術集会、2016 年 7 月 24 日、別府コンベンションセンター(大分県・別府市)

加藤茜、須山達也、淵田明子、和田久美子、闘病仲間が亡くなったことを伝えた後の看護師の心情、日本小児看護学会第 26 回学術集会、2016 年 7 月 24 日、別府コンベンションセンター(大分県・別府市)

淵田明子、加藤茜、須山達也、和田久美子、子どもが亡くなったことを闘病仲間に伝えるときの考慮に関する分析、第 14 回日本小児がん看護学会学術集会、2016 年 12 月 16 日、品川プリンスホテル(東京都・品川区)

〔図書〕(計 件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

和田 久美子 (WADA, Kumiko)
福島県立医科大学・看護学部・教授

研究者番号：50320867

(2) 研究協力者

淵田 明子 (FUTITA, Akiko)
東海大学医療技術短期大学・看護学科・教授

(2) 研究協力者

加藤 茜 (KATO, Akane)
東海大学付属病院・看護部

(2) 研究協力者

須山 達也 (SUYAMA, Tathuya)